

ボンペ顕彰記念会についての報告

小川鼎三先生の亡くなられた一九八四年（昭和五九年）十一月、緒方富雄、大島蘭三郎、沼田次郎、酒井シヅ、中西啓、宮永孝、それに私の七人が集まり、ボンペ顕彰記念準備委員会が発足した。

主旨は一八五七年（安政四年）から一八六二年（文久二年）までの五年間長崎に滞在し、日本で初めての系統的西洋医学教育を実施し、日本最初の本格的洋式病院を建設、明治以降の日本医学に多大の貢献をしたボンペ・ファン・メールデルフォールトを顕彰したためであった。数回にわたる準備委員会の結論は、ボンペに関係の深いオランダのハーグ市と、ボンペ終焉の土地であるベルギーのブリュッセル市に彼の胸像か、銘板を贈りたい。できれば、『ボンペ日本滞在看聞記』の原著“VUF JAREN IN JAPAN”を復刻したい。さうすくこの旨をオランダ大使館に連絡しておいた。

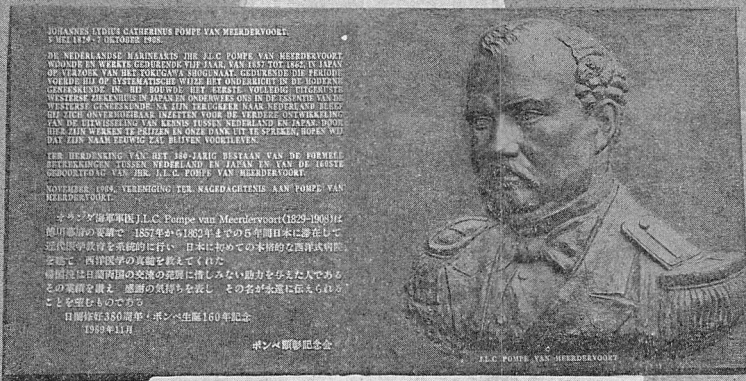
大使館からはオランダ外務省に通知したようで、結構なことなのでいづれ連絡するとの回答を得た。一九八七年十月、ハーグ市長来日のおり、大島、大滝の二名で面会の予定であったが、先方の都合で中止となった。一九八九年（平成元年）八月、再度連絡があったため、酒井、大滝の二名でオランダ大使館を訪れ、ハーグ

市長ハーベルマンズ、助役ベウゼコム氏と懇談した。伝達された事は、今年の日蘭修好三八〇周年、ボンペ生誕一六〇周年に当るので、ぜひ日本側から申し出のあったボンペ顕彰を今年中に実行したいとのことであった。さあ大変だ。緒方先生はすでに亡くなられ、大島先生は病床に臥しておられる。とにかく新委員を選出しなければならぬ。最終的に選出されたのが次の一六名であった。名誉会長に外務大臣・中山太郎、会長に国立循環器病センター名誉総長・曲直部壽夫、実行委員長大滝紀雄、実行委員、相川忠臣、井石哲哉、小野肇、酒井シヅ、芝哲夫、高橋勝三、長門谷洋治、中西啓、沼田次郎、藤野恒三郎、松石久義、宮永孝、安田克廣。

顕彰会の事業としては、ボンペ銘板（肖像及びオランダ語と日本語の説明付き）三個を作製、ハーグ市、長崎市、長崎大学医学部へ贈呈すること。ボンペ顕彰記念医学講演会を東京、大阪及び長崎の三カ所で開催することが決定した。

主催者は、ボンペ顕彰記念会及び、財団法人循環器病研究振興財団。

協賛は、日本医史学会、日本医師会、（社）日本病院会、（財）医学教育振興財団、関西日蘭協会、佐倉日蘭協会、順天堂大学、東京慈恵会医科大学、長崎大学、長崎大学医学部、長崎大学歯学部、長崎オランダ村（株）、（財）日蘭学会、長崎県、長崎市、東京都医師会、大阪府医師会、長崎県医師会、長崎県歯科医師会。ハーグ市への記念銘板贈呈式は、一九八九年十一月八日、オランダ大使館で行われた。中山外務大臣、曲直部会長、羽田春逸日



本医師会長、ボスチユマス・メイエスオランダ大使他数十人の出席のうち、敵かな贈呈式に続いて、両国間の心温まるレセプションが続いた。長崎市への贈呈式は、一九九〇年八月二日長崎「旅」博覧会の前日、松が枝会場、幕末近代館で、本島等長崎市長に手渡された。長崎大学医学部への贈呈式は、同年十一月二日、長崎ロイヤルホテルのレセプション会場で行われた。

記念講演会は次のとおりであった。

東京会場 平成二年九月二十二日(土) 順天堂大学有山登記念講堂

講演会に先立ち開会式が行われた。

講演 演「ボンベと長崎」羽田春兔(日本医師会長)

鼎談「患者と医師の信頼関係」

提言者 阿部正和(東京慈恵会医科大学学長)

村上陽一郎(東京大学先端科学技術研究センター 1教授)

司会 吉田 忠(東北大学文学部教授)

特別講演「重層的な医療」遠藤周作(作家)

羽田会長は長崎で生まれ、小学校の前半を同地で過ごした。ボンベに深い関心を示された。阿部氏はインフォームド・コンセント、権力を捨て、権威を保てなど八項目に互る医師の基本姿勢を明快に解説。村上氏はアメリカでの経験、白衣問題などに触れ、吉田氏は諸問題についての確に司会された。遠藤氏は患者の立場からこの問題に触れ、いずれも聴衆に深い感銘を与えた。

大阪会場 平成二年十月十三日(土) 大阪ロイヤルホテル

中山外務大臣よりの長文の祝電が披露された。

講 演 「医学の進歩を支えるもの」 曲直部壽夫(本会会長)

特別講演 「オランダからの刺激」 司馬遼太郎 (作家)

曲直部会長の講演は実に多くの人々の努力と善意が医学の進歩を支えているかを具体的に話され、特別講演は最近オランダから帰国した演者がボンベのエピソードを交えた興味あるものであった。

長崎会場 平成二年十一月三日(土) 長崎大学医学部記念講堂

講 演 「ボンベと長崎」 羽田春兔 (日本医師会長)

「日本における医学のバイオニア・ボンベ」

H. Boukers (Leiden 大学)

特別講演 「シーボルトからボンベまで」 吉村 昭 (作家)

羽田会長はボンベが日本へくるまでの経緯について、ポイケル教授はボンベのバイオニア精神を強調した斬新な講演であった。吉村氏は二人の時代の相違と仕事の相違について話された。

最後にボンベ顕彰記念事業終了報告が、大滝、酒井によってなされ閉会となった。今回の記念事業が大過なく、無事終了できたことは、本事業を理解され援助と協力を惜しまなかった多数の方たちのお陰と深く感謝する次第である。

(大滝 紀雄)

古河歴史博物館の医史学展示品紹介

平成二年十一月三日快晴の文化の日に、古河市民長年待望の博物館が、出城跡地に、和蘭陀公使デイク・ファン・テッセン氏御一家の参列を得て見事に開館した。

古河の地には万葉集の三歌があつて、崇神天皇皇子豊城入彦命の頃から開けた河沼に沿った町で、古代東山道文化圏にあつた。

平安時代末は平家八条院荘園に入り、鎌倉時代には源頼朝の片腕下河辺行平領地となつた。室町時代は古河公方(医聖田代三喜あり)の領であつたが、徳川時代から譜代大名の地に代り就中寛永十年土井利勝が佐倉城から十六万石で古河入城し、小笠原、松平、本多、奥平(前野良沢、福沢論吉らの中津藩へ)、堀田(順天堂の佐倉藩へ)……の十指に余る藩の交代があつた。その中で古河の地と一番密着していたのは土井藩である。

この古河土井藩は天和元年鳥羽城に十年、元禄五年唐津城に七十三年の移封があつて、宝暦十二年再び明治まで古河に戻り在城した。

鳥羽城時代に京都にいた河口良庵(長崎カスバル医学創始者)の一番弟子河口良閑を召抱え、唐津城ではその孫河口信任が長崎に学び栗崎道意から免伝を得て後に古河城移封に従い、藩主土井利里の京都所司代に随行して京都で明和七(一七七〇)年人体解剖をして『解屍編』を刊行した。

河口信任は古河に帰藩後は少年鷹見忠常こと泉石に蘭学の手引